

高校に入ってから初めてのの、秋が来た。先週まではじっとりと汗ばむような暑さが続いてきたが、九月下旬になると、さすがにそれも衰退してきたらしい。

聖太しょうたは、駅から学校へと繋がる川沿いの道を、ぼんやりしながら歩いていた。もう秋になつてしまつたのか。

黒い縁の眼鏡をちよつとあげて、眠気の残る目をこする。高校に入つてからは、本当に色々なことがあつた。

「聖太、おはよう」

突如、背中に鈍い衝撃が走る。朝からこんな風に人の背中を叩いてくる奴は、柏木舞衣よりほかに誰もいない。

「んだよ、いてーな」

高校であつた『色々なこと』の中には、彼女との再会も含まれている。再会というよりは、邂逅かもしれない。

聖太と舞衣は幼馴染みで、小学校までは家が近かつたせいかよく一緒に遊んでいた。し

かし、中学校に上がる前に舞衣が隣の市に引っ越していったので、中学の三年間は全く顔を見ていない。それなのに、どういう縁だか、高校に進学すると、同じクラスに舞衣の姿があったのだ。

「なにぼーっとしてるの？」

「いや、別に」

舞衣は、変わった。当たり前のことながら、なんだか不思議だ。小学生の頃は、聖太たち男子に交じって、一緒に川魚を捕まえたり、田んぼの道で鬼ごっこをしたりして遊んでいたのに、高校生になっただけでなぜこんなに大人っぽくなってしまったのだろうか。

おかつぱだった舞衣の髪は肩を過ぎ、今は艶のあるロングヘアだ。数学が得意な彼女は、学業でも良い成績を修めていて、部活の方でも活躍している。

（それに引き替え、俺はなあ……）

聖太には、特技がない。才能もない。ただ強いて挙げるとすれば、国語は得意科目

だった。古文が好きというだけのまぐれで、
国語系の科目では成績が良い。しかし理系科
目はてんで駄目だ。数学の単位取得すら危ぶ
まれている。

幅が広く流れの緩い川を横目に、中学の三
年間が余計に舞衣を遠く感じさせるのかも
しれない、と考えた。

自分は、舞衣のように成長できている気が
しない。どんどん先を越されていくようだ。

「あーあー」

聖太が声を出したので、少し前を歩いてい
た舞衣は怪訝そうにこちらを振り返った。

「なに、いきなり」

「秋来ぬと、目にはさやかに見えねども、風
の音にぞおどろかれぬる、っていう和歌ある
よね」

聖太の言葉に、彼女は露骨に眉をひそめる。

「また古文？　ほんと好きだね。その歌、ど
ういう意味」

国語を嫌う理系脳の舞衣が、聖太の古文の

話に付き合ってくれることは滅多になく、嬉しくなつて目が覚めた。

教室に入ると、ベストからカーディガンに衣替えした鮎川春歌が、真つ先に声をかけてきた。

「ねえ、なんで黙ってたの」

ふんわりとしたボブを揺らし、詰め寄ってくる。怒つたような口調とは裏腹に、目が楽しそうだ。聖太の後ろにいた舞衣が、どうしたの、と尋ねる。聖太も、春歌にこんなことを言われるような心当たりがない。いったい何の話だろうか。

「菊池くんのお母さん、作家さんなんでしょ」
彼女の声に反応するように、教室内の視線が聖太に向けられた。一瞬、息が詰まり、口の中が渴く。眼鏡のフレームに脈を感じた。確かに聖太の母は作家だ。有名とまではいかないが、まあ名前は知られていると思う。だ

けど。

（なんで、鮎川が知ってるんだよ）

誰にも知られないようにしていたのに。そのためにわざわざ、同じ中学から誰もいかないうような高校を選んで進学したのに。なぜこんな急に、母が作家であることがばれてしまったのだろうか。

「聖太？」

舞衣の声で我にかえる。曖昧な返事で適当にごまかして、春歌の視線をかわした。

廊下に出ると、舞衣が後を追ってきた。

よく考えてみれば、この学校の中で彼女だけが聖太の母親のことを知っている。

「舞衣、鮎川に話したの」

「え、何を」

「何って……母さんのことだよ」

苛立って、つい声が大きくなる。

「うん、春歌は本が好きだから。話しちゃ駄目だった？」

「駄目に決まってるじゃん！ お前、ほんと

最悪」

舞衣は、怯んだように一瞬言葉に詰まった。

「なんで駄目なの、隠す必要なんかない」

「あるよ……！」

「いいじゃん、お母さんが作家なんて、凄
もん」

「作家ぐらい、誰だってなれるよ！」

「そんなことないって、やっぱ凄
いよ。聖太のお母さんの小説、すごく面白いしさ！
自慢してもいいじゃん」

尚も食い下がる舞衣に、苛立ちが募る。

「自慢なんかしねえよ！ ふざけんな！」

気が付くと、舞衣を壁に追い込んでしまっ
ていた。彼女の大きい目に、かすかな怯えの
色がにじむ。

「……ごめん」

語尾が、かすれていた。

はっとする。小学生の頃は見上げていた舞衣
の目が、今は自分より下にある。聖太のほう
が、身体が大きいのだ。

聖太は、彼女を小さい頃から見ている、仲も良かった。打たれ強い性格も知っている。だから、つい言い過ぎてしまう。

舞衣は目を伏せ、ごめん、と呟いて行ってしまった。

（何してんだ、俺……）

思わず両手で顔を覆った。負けん気の強い舞衣を、あんなに素直に謝らせたのは初めてだった。

数学は舞衣が一番好きな科目だ。それなのに、今日はあまり身が入らない。

（私、馬鹿だな。忘れてたなんて）

小学校にいた頃、聖太の母は学校中の有名な人だった。美人で人あたりも良く、地域の行事にもきちんと参加し、おまけに作家なんて、本当に素敵な母親だとみんなが羨んだ。この時は、聖太も自分の母親を自慢に思っていたに違いない。

舞衣たちが五年生くらいの時、夏休みの宿題として読書感想文を書かされた。全員の感想文を県のコンクールに応募すると言われ、必ず提出するように釘を刺されたが、舞衣は作文がこの上なく苦手だった。そこで、当時の仲の良かった舞衣と聖太は、分担して一緒に宿題をしたのだ。

一文を書くだけでも悪戦苦闘している舞衣の隣で、聖太は黙々と手を進め、あつという間に書き上げた。

（作文とか国語の事になると、人が変わったみたいに真剣な目をするんだもんな）

舞衣はその職人のような聖太の目が、好きだった。感想文、一緒に頑張ろうぜ、と言ってくれたことが嬉しかった。

難なく書き上げた感想文を、聖太は心配そうに舞衣に見せ、アドバイスを求めてきた。何も文句の付け所がないというのに、彼は何度も推敲を重ね、おまけに舞衣の作文まで手伝ってくれた。

休みが明け、県のコンクールの結果通知が届いた。見事に聖太の作文が最優秀賞をとった。しかしそれと同時に、クラス中で聖太の不正の噂が持ち上がった。彼はもともと国語だけはよくできたが、それにしても県のコンクールで最優秀賞など、そうそうとれるものではないので、

「お母さんに書いてもらったんだろ」

誰かがそう言い始めたのがきっかけで、先生までがそう思い込んでしまったのだった。舞衣が聖太の潔白を証明しようとしても、単に幼馴染みを庇っているようにしか思われず、結局聖太の最優秀賞は形だけのものと思われてしまった。

その日から聖太は、母親のことを知られるのが怖くなったのかもしれない。

（当たり前前だ、自分が一生懸命書いた作品を代作だなんて言われたら、悔しいに決まってる。お母さんのこと、知られたくないに決まってる）

当時の聖太はそんなに悔しがっている様子
がなかった。舞衣の中でこの件の記憶
が薄れていた。

平生は温厚な聖太が、あんなに口調を荒げ
るなんて。

舞衣は、聖太の秘密を、守ってあげられな
かった。感想文を手伝ってもらったのに、恩を
あだで返すような事をした。

十月に入った。定期考査一週間前は、どの
部活も休みになるので、放課後の教室には居
残りで勉強する生徒が何人かいる。

聖太は、舞衣と春歌が机をくっつけて勉強態
勢に入ったのを、ぼんやり眺めた。

あれから彼女とは一回も話せていない。
罪悪感が消えない。言い過ぎてしまった。母
親のことが知られたくらいで、あれほど動揺
してしまいう自分にも、嫌気が差す。

（舞衣、ごめん）

心の中でなら素直に謝れるのに、などと情けないことを考えながら、彼女たちの横を通り過ぎた。

「あ、菊池くん！ 待って」

急に春歌が腕をつかんできたので、つんのめりそうになる。

「私たちに古文教えてよー」

たち、ということとは、舞衣にもか。

「なんで俺……」

ずれた眼鏡を直しながら、春歌の腕をやりわり解いた。

「早くー、ここ座って」

くりつとした目が、見上げてくる。また腕を掴まれて、反論の余地もなく春歌の隣に座らされた。

「鮎川は古文できるじゃん。数学もできるしさ。俺が教えることなんか、何も」

春歌を挟んでいるとはいえ、舞衣と横一列に並んでしまった。気まずい。

（さつきから舞衣、何も言わないし目も合わ

せないし、やっぱり嫌われたよなあ)

今からでも断ろうと、聖太が席を立ったのと、舞衣が鞆に手をかけたのが同時だった。

「私、今日は帰ろうかな」

長い髪に顔が隠れて、表情がわからない。ただ、心なしか声が沈んで聞こえる。

「いや待って、帰んな！ 古文教えるから」

気が付くと、聖太は舞衣を引き止めていた。彼女の驚いたような目が、こちらを見上げる。

「あ、ほら、古文できないじゃん、お前」

(…：うわー)

緊張して、とてつもなく失礼なことを言うてしまった。失敗が重なる。

「うん」

しかし彼女は、おもむろにカバンを机の横に戻した。

「舞衣と菊池くん、なんかあったの？」

春歌が心配そうに舞衣の顔を覗き込む。

「ううん、なにも」

ぱっと笑った顔が、ほんの少しだけ曇って

いた。

「ああ、なるほどー」

春歌と舞衣が、同時に声を上げた。難解な文語文の解説が、やっと腑に落ちたらしい。いざ始めてしまえば舞衣とも普通に話ができたので、一緒に勉強をして正解だった。教室内に何人かいた生徒が減り始め、やがて三人だけになる。

春歌が、ちよつと疲れたね、と言ったので勉強を中断して雑談に入った。

「古文楽しいよね。私は結構好きだなあ」

「え、鮎川って古文好きなの？」

意外だった。春歌は理系に進むものだとかかり思っていた。なにせ、数学のテストでは舞衣の点数を常に上回っている。

「菊池くん、よく和歌の話をしてるよね。一番好きな歌とかあるの？」

友達から和歌の話が振られたのは、おそら

く初めてだった。嬉しすぎて、つい早口になる。顔がにやけてしまうほどだ。

「選べないな、でも……やっぱり百人一首かな。二番の持統天皇の歌とか、五十七番の紫式部の歌とか」

春歌が瞠目する。

「歌番号と作者まで覚えてるの？」

「まあ、好きだから。うーん、『大江山いく野の道の遠ければ　まだふみもみず天の橋立』っていう歌分かる？　六十番の、小式部内侍の歌」

二人の顔を見ると、苦笑されてしまった。

「知らないや。マイナーそうだね」

メジャーだよ、と心の中で思ったが、口には出さないでおいた。

「どんな歌なの、それ」

さすが春歌だ。舞衣のように『どういう意味？』とは聞かず、『どんな歌？』と聞いてくるところが良い。和歌の意味だけを知っても、その歌が詠まれた経緯を知らなければ意

味が無いのではないか、と聖太は勝手に思っているのだ。

「この歌の作者の小式部内侍っていう女の人、母親がものすごい才能のある歌人だったんだ。その才を受け継いで、小式部内侍も和歌を詠むことに長けていたんだけど、母がなまじ立派な歌人だったから、小式部内侍の読む歌は母の代作だ、なんていう噂が立つてたらしい」

聖太は、そこで意図せず言葉を切った。舞衣の表情が、険しいように見える。

「舞衣、どうかした？」

「え？ 別になにも」

気のせいだったのだろうか、彼女はいつも通りの顔で、話の続きを促した。

「当時流行っていた、チームに分かれて和歌を詠み優劣を競い合う、歌合うたあわせという遊びがあるんだけど、小式部内侍もそれに参加しようとしていたんだ。で、その日が近づいてきたある時、藤原定頼という人が彼女のことをか

らかったらしいのね」

春歌が楽しそうに顔を寄せ、どんなふうにと聞く。

「お母さんが住んでいる丹後から、歌合のための手紙は来ましたか、ってね。要は、母からの代作は届いたかっていう皮肉だよ。当然内侍は悔しいからさ、言い返すんだけど、その歌が、これ」

母がいる丹後は、大江山を越えて生野を通って行く道が遠いので、まだ天の橋立の地を踏んだこともなければ、母からの手紙も見えていません。

「つまり、あくまでも自力で歌を詠んでいるんです、って言いたかったんだろ。こんな技巧的な歌を即興で詠まれたら、ぐうの音も出ねえな」

聖太が言うと、春歌が首をかしげた。

「技巧的？」

「うん、掛詞ってやつ。授業でやっただろ、

駄洒落みたいなの」

春歌が、考え込むように視線を上に向ける。
まさか友達にこんなうんちくを語っても良
い日が来るなんて思ってもみなかった。

「あ、分かった！ 行くと幾野、踏みもみず
と文ふみも見ず、を掛けてるんだ。昔の人って頭
いいねえー」

掛詞と言っただけで、二つとも見抜いてし
まう春歌の賢さには、正直舌を巻く。

「まあ、悔しいよなあ。自分が丹精込めて詠
んだ歌なのに、母親の代作なんて言われたら
さ、言い返したくもなるよ」

聖太自身、小学生の時に小式部内侍と同じ
ような経験をした。ただ残念ながら聖太は、
彼女のような才能は持ち合わせていない。そ
れでも一応は、悔しいものだ。自分の作品が
代作だと思われてしまうのは、自分自身を否
定されているようで、なかなか辛いものがあ
る。当時は、何度母親に八つ当たりをしたか
知れない。友達に泣き顔を見られたくなくて
痩せ我慢をしても、家に帰るとなぜかそ

の我慢が切れてしまうのだ。その度に母親は苦笑して、聖太にこの和歌を教えてくれた。
（今思えば、俺が古文にはまったのは小式部内侍のおかげかもしれないな）

太古の昔に、自分と同じような悩みを持っていた人がいたという事実が、不思議と胸に迫ってきた。それまで字面だけだった歌人が、くつきりとした形をとって甦るように思われた。

小式部内侍は、悔しくなったとき誰に慰めてもらったのだろう。

（そういえば、感想文の件では舞衣が慰めてくれたんだっけ。自分のことみたいに必死になっけて、ちよっと珍しかったよな）

彼女はもうとっくに忘れてしまっただろうが、聖太の作文を一生懸命に守ってくれたことが、この上なく嬉しかった。

「あ のっ」

舞衣の声で、我に返る。

「ごめん、私やっぱり、先に帰る」

舞衣は椅子から腰を浮かせるやいなや、ドアへと駆け出した。呼び止める間もなく、その姿は視界から消えた。

どうしよう、どうしよう……。

人気のない薄暗い廊下には、雨の匂いが立ち込めている。開け放たれた窓の向こうは、霧雨だ。

（私のせいで）

——自慢なんかしねえよ！ ふざけんな！

聖太の言葉が頭から離れない。鞆を抱えて走っていると、寒さと一緒に自分の愚かさが身に染みってくる。この先、舞衣のせいで、聖太の作品が蔑ろにされることがあるかもしれないと思うと、怖くなった。

（聖太は、一生懸命隠してたんだ。自分のこと、守ってたんだ。それを、私が）

小式部内侍は、どれだけ悔しかっただろう。自分の歌を否定されて、代作だと言われて。

聖太はきつと、彼女の和歌に救われただろう。でも舞衣は、逆のことをした。

（聖太を、困らせちゃった……）

目頭が熱くなつて、鼻の奥がつんとしてくる。ぎゅつと目をつぶったが、泣きそうだった。

慌ててトイレに駆け込む。テスト期間で、校内に人がいないのが幸いだった。

手洗い場に鞆を下すと、一気に気が緩んで嗚咽が漏れる。限界だった。歯を食いしばったが、涙は止められなかった。

（私、馬鹿だなあ）

最近、上手くない事が増えた。聖太の母について春歌に話したのは、舞衣と彼が幼馴染みだという事を示唆したかったからだ。春歌と聖太の仲が良くなって、古文の話に花が咲いてしまうと、舞衣は複雑な気分になる。自分にはできない話で聖太と盛り上がる春歌が、正直羨ましかった。

それに彼女は、頭もいい。舞衣が得意な理系科目でさえ、いつも負ける。今までの定期考

査や学力テスト、抜き打ちのテストに至るまで一度も勝ったことがない。頑張って勉強しても、あと一歩及ばないのだ。高校に入るまで、数学では誰にも負けたことがなかったのに。

春歌に全部取られてしまう気がしていた。自分の努力が足りないのは分かっている。それなのに、彼女を羨まずにはいられないのだ。格好悪い。恥ずかしい。こんなところを、聖太には見られたくなかった。

（春歌は、可愛いしお洒落だし、国語も数学もできる。私は？ 数学以外に何もない。数学だって、春歌に負けてる）

嗚咽が、いつしか泣き声に変わった。どうして舞衣ばかり、いつも上手くいかないのだろう。頑張っても、結局空回りで。大事な友達にも、嫉妬して。たくさん困らせて。

（聖太に嫌われちゃったら、どうしよう）
こんな時にも、自分のことしか考えられないなんて。

「は、まじかよ！」

「まぐれだって」

聖太は、現代文の答案用紙を見下ろした。三桁の、赤い数字。思わず頬が緩む。

これで、定期考査のテストがすべて返却された。思った通り、数学は赤点間際だったが、現代文で百点を取ったので怒られずに済むだろう。

「お前、国語に特化しすぎ！ 古文も学年一意だったじゃん」

授業終了後すぐに、聖太の周りに人が集まってきた。隣の席の春歌も、目を丸くして声を上げる。

「本当に国語ができるよねえ、菊池くんは」
そう言うお前もな、と男子たちにからかわれ、春歌は照れ笑いする。

「どうしたら百点なんか取れるんだよー」
友達が聖太の頭を小突く。

「うーん、文章は読んでて楽しいし、大体は
感覚で解いてるからなあ」

言ってから、失敗に気が付いた。当然この
後に来る言葉は。

「やっぱ才能なのかな。母親が作家なんだ
ろ？ いいなあ、俺もそういう遺伝子が欲し
かったー」

分かっていても、胸の奥が痛くなる。聖太
にとって、この言葉は一種のトラウマなのだ
ろう。

「別に、才能なんかじゃ……」

平生の通りに笑おうとしたが、顔が強ばっ
て上手く口角が上がらなかった。

（今回は、いつもよりはちゃんと勉強したん
だけだな。感覚で評論文が解けるのって、才
能なのかなあ）

ふと人の輪の外に目を向けると、舞衣と目が
合った。慌てたように、彼女は目を逸らす。

（嫌われてる……）

聖太は溜息をついて、席を立った。

そういえば、舞衣が一回だけ「その歌、どんな歌なの？」と聞いてきたことがあったよ
うな。どの和歌だったっけ。

最近、気が付くと舞衣のことばかり考えているようだ。

カーデイガンの袖を引っ張りながら、学校から駅へと繋がる川沿いの道を歩く。高台のようになっている道から、河川敷を見下ろした。ここ数日は雨が降ったり止んだりしていたので、草が露できらきらしている。夕日のオレンジと相まって、美しい。

（あ：：）

聖太は息を呑んだ。小学生が野球をしているずっと先の河川敷に、舞衣が立っている。風に靡く、長く艶のある黒い髪。後ろ姿だけで、すぐに分かった。

一瞬躊躇ったが、深く息を吸うと、河川敷に降りた。

「なにしてんの」

聖太が声をかけると、彼女は驚いたように振り返った。持っていた鞆を胸に抱くようにして俯き、目を逸らす。

「聖太、ごめん」

唐突すぎて、何の事だか分からない。

「今日のテスト返しの時、見てたよ。私が、みんなに話しちゃったから」

舞衣の声が震える。聖太は、はっとして彼女の顔を覗き込んだ。

「俺のほうが！　ごめん、泣かせてごめん！」
舞衣がしゃがみこんだので、聖太も隣に座つた。すぐそばで、嗚咽が聞こえる。

「俺、母さんと比べられるのが嫌で。母さんの才能に敵うわけがないのに、馬鹿みたいだ。ほんと、ごめん」

黒い袖から出ている、舞衣の白い指。左手の中指に絆創膏が貼ってある。

「いいじゃん」

小さい声が、耳に届く。

「聖太だって、才能あるじゃん。私と違って、努力すれば芽生える才能が、あるじゃん」

努力すれば、芽生える才能。

「舞衣だってあるよ。数学、九十点台だろ」

「百点じゃなきゃ意味ないよ！」

「そんなこと、ない」

「だって、聖太は百点なんだもん！ 春歌が

百点取れるなら、私だって」

舞衣は、思わずのように片手で口を覆った。

返す言葉が、すぐには見つからない。

（舞衣でも、劣等感を抱くことがあるんだ）

聖太が母親に対して感じるこの気持ちを、今舞衣も感じている。

それでもやっぱり、舞衣と聖太には差があるように思う。

聖太は舞衣の左手をとった。

「じゃあ、このペンダコは。こんなにタコができるまで勉強してんじゃん。その努力は？
こんなに頑張れるのは、才能って言わねえの？
こんな俺にも、たぶん鮎川にもでき

ねえよ」

舞衣は、初めて涙に濡れた目を上げた。

「……そうなのかな」

長いまつげの先の、雫。その中に、自分の目が映った。

「大器は晩成す！　って言うじゃん」

聖太が言うのと、彼女はふっと笑った。

「ありがと。でもその言葉、そっくりそのまま返すね。ねえ聖太、ちよっと靴下脱いでよ」

「なんだよ、また唐突だな」

彼女の言葉に従って、右足の革靴と靴下を脱いだ。芝生の感覚が、足の裏に心地よい。

「親指より人差し指が長い人はね、親より出世するんだって」

「まじで？」

指を見比べると、人差し指のほうがわずかに長い。

「じゃあ俺、親よりすごくなるのかなあ」

「かもね。ペンダコからの、指つながりで思い出したんだ」

思い出す。その言葉に触発されたかのように、聖太は大事なことを、思い出した。

唯一、舞衣が「どんな歌？」と聞いてくれ

たのは、伊勢物語に登場する和歌だったのだ。

「舞衣」

「なに」

伊勢物語の『筒井筒』という話に登場する和歌だった。

「あのさ」

「うん」

仲の良かった幼馴染みの男女が、互いに想い合っていたながら、恥らって気持ちを伝えずにいたが、ある時ついに、男が女に和歌を送るのだ。

「筒井筒、井筒にかけしまろが丈、過ぎにけらしな妹見ざる間に」

幼いころ丸い井戸と高さを比べあった私の背丈は、もう囲いの高さを越したようです。暫くあなたと会わないでいるうちに。

（何言っていたんだ、俺。舞衣が筒井筒のことな

んか、覚えてるはずないだろ)

舞衣は案の定、返事を考えあぐねているようだった。

(ほら、やっぱり。忘れてる)

「……女、返し」

まさか。舞衣の声が、はっきりと鼓膜を打つ。彼女はそのまま返答歌を暗唱した。

「くらべこし、振り分け髪も肩過ぎぬ、君ならずして、誰かあぐべき」

幼い頃からあなたと比べあつてきた私の振り分け髪も、今は伸びて肩を過ぎました。

あなたでなくて誰のために髪上げをしましたようか。

(まさか)

暫くは、衝撃で声が出なかった。体育座りの膝に顔を埋める舞衣から、視線が動かなくなる。

「なんで覚えてんだよ。古文なのに。しかも、小学校の頃の読書感想文のことだぞ」

県のコンクールで聖太が最優秀賞をとつ

たとき、読んだ本がこれだった。児童書として訳された、伊勢物語。

「別に。そんな深い意味は、ないからね」
そっけなくて、乾いた返事。それでも。

「すげえ、嬉しいや」

頬が緩むのを、抑えられなかった。

「まぐれだよ、まぐれ」

舞衣が聖太の口調をまねた。それから顔を上げ、はにかんだように笑う。

「そーいや、舞衣、ここで何してたの」

水が流れる音に交じって、遠くのほうで、誰かのホームランを喜ぶ歓声が上がった。

「昔にも、こんな景色があつたのかなあつて
思つて、見てたんだ。古文も、勉強と思ふか
らつまらないけど、聖太の話聞いてからは
少しだけ興味が出てきたかも」

彼女につられて、聖太の視線も川に向く。
雨上がりで、少し流れが速くなった川に、霧
がかかっている。岸の背の高い草に露が光つ
て、夕日が反射している。この川は、いつの

時代からあったのだろうか。

「むら雨の、露もまだ干ぬまきの葉に、霧立ちのぼる秋の夕暮、っていう歌があるよ」

聖太が言うと、舞衣は目を丸くした。

「私にも、なんとなく分かった。まきの葉じやないけど、この景色そのままだね」

「うん。昔の人だって今の人と同じ、日本人だから。同じこと考えてても、不思議じゃないよ。もっとずーっと先の時代には、平成の文章が古文って呼ばれてるかもしれないし」

川を遡って、平安時代に行けたらいいのに、ふとそんなことを考えた。

「ねえ」

舞衣が、服の裾を引っ張ってくる。

「私ね、好きだよ」

「は、なにが」

びっくりした。急に、心臓の音が耳に障る。

「数学が。聖太が国語好きなのと、同じくらい」

「ああ、うん」

顔が熱くなった。心のどこかで、期待してしまっている。

「だからさ、付き合ってよ」

「何にだよ」

余計なことを、言わないで欲しいものだ。

「数学の話に！」

「はあ」

舞衣は嬉しそうに立ち上がった。

「あれ、見て」

舞衣が堤防の上を指差したので、聖太は袖で眼鏡を拭いてかけなおした。

「堤防に、中学生が五人いる。そのうち三人は傘を持っている。二人は持っていない。つてことは、傘率は、六十パーセントだね！えっと、後はね」

「うわ、お前日常的にそんなことやってたのかよ。すごいな」

聖太なら、やらなくてもいい計算などは死んでもやらないと思う。

「計算するのって、楽しいじゃん」

「どこがだよ……あっ」

急に、化学のテストが赤点だったことを思い出した。

「まずい、明日は追試だ！」

聖太も立ち上がると、堤防に向かって駆け出した。

「待って、そういえば私も！　古文が赤点だったから」

「まじかよ！　せっかく俺が教えてやったのに」

後を追ってくる舞衣を、走りながら振り返った。

「私たちの頭の中、足して二で割りたいね」

「ほんとだよ」

きらきら光る、川の水と舞衣の目。

彼女も、聖太と同じように何かに悩むことがあるらしい。昔の人と今の人の考えが重なることがあるように、聖太と舞衣の劣等感も重なった。

高校生活は、まだ先が長い。これからは、劣

等感でない何かが重なればいい。思い出に残
るような時間を、舞衣と共有できたら。
やっぱり、平安時代よりも平成が好きだな、
と思った。